

## 第3章

### 主なセンター事業のあゆみ

---

ボランティア活動を希望する学生へ情報提供等を行い、地域からはボランティア募集の相談に応じるなど、この両者をつなぐこと（ボランティアコーディネート）がセンター根幹の役割です。そのために、様々な地域団体のボランティア情報やイベント・講座などのチラシを見やすく配架したり、センターの広報ツールを活用して情報発信を行うことにも取り組んでいます。これら日常的な活動も、さまざまな関係者の努力や試行錯誤があって現在の形になりました。そのあゆみと関わった卒業生スタッフの声をご紹介します。

2002

両キャンパスとも学生スタッフが地域団体を訪問し、活動内容やボランティア募集状況などをヒヤリング。それらの情報をもとに、学生が集まる学内スペースでボランティア紹介を開始。

2003

学生スタッフがシフトを組み、センター内でボランティア相談対応を受ける環境が整う。  
センターのホームページ（以下、HP）開設とボランティア情報などを掲載したメールマガジンの配信を開始。メルマガ・HP担当の学生スタッフが内容作成、更新、配信などを行う。

2004  
2005

2006

HPリニューアルに伴い『学生スタッフのページ』を新たに設け、ホームページ班が更新を担う。その他、ボランティアコーディネート班や、チラシ班など学生スタッフが運営のための班に分かれての活動が本格化する。

2007

2008

学生スタッフの提案により、ボランティア募集团体の活動内容を把握し協力・連携の体制を整備する目的で、団体登録制度を開始。

2009

学内の認知度向上を目指し、深草学生スタッフ広報誌『ボラゴン』、瀬田学生スタッフ広報誌『Volunteer News』、センター事務局が『ボランティア・NPO活動センター通信』をそれぞれ発行開始。

2010

HPリニューアルに伴い、事務局がページ全体の運用・更新を担う。

2011  
2012  
2013

2014

学生スタッフの提案により、SNS(Twitter、facebook)を開始。運用・更新は事務局、発信内容は学生スタッフとCDが協働して作成。

2015

2016

2017

2018



フェイスブック400いいね達成の時

2019

大学のブランディングに合わせてHPをリニューアル。年度末をもってメールマガジンを終了し、SNSとHPを連携させた情報発信に力点を置く。



ボランティア相談対応の様子（瀬田）



チラシスタンドを見やすく整理（深草）



広報誌配布の様子（瀬田）



情報提供について打ち合わせ（深草）



現行のホームページ

## ● 地域団体訪問とボランティア情報の収集

### ■ 2004 年度社会学部卒業 小川 友香里 (旧姓: 小林)

設立当初に集まった学生スタッフは、それまでに各自がボランティアを経験しており、自分で「ボランティアをする」から、学生に「ボランティア情報を広める・企画する」という思いを持っていました。そこで、大学でのボランティア・NPO活動センターとして何をすればよいか、それぞれが考えを出し合いました。

まず地域で活動されている団体へ訪問し、活動内容や学生ボランティア受け入れ等について調査したり、学内においてはアンケートを実施したりしました。それにより、学生受け入れ体制がない団体もあることや、学生が求めるボランティアとは違うなど、情報提供において考えるべき課題も見つかりました。

その後、訪問で得た情報や先生方からの情報をもとに、手探りの中ではありましたが青志館1階にて学生への情報提供を始めていくことに繋がりました。



2004 年の団体訪問の様子

## ● ボランティアコーディネート研修

### ■ 2011 年度法学部卒業 内田 真梨 (旧姓: 竹本)

学生スタッフには、センターにボランティアを探しに訪れた学生の想いを受けとめながら、学生とボランティア活動を繋ぐ重要な役割があります。これには知識や経験が必要な技術であることから、外部講師をお招きして、レクチャーと模擬コーディネート形式による研修を2010年度に行いました。

研修を通じて、相手の意向やニーズを引き出すための聞き方、言葉だけではないボディランゲージや表情など、相手に伝わるコミュニケーションの重要性を学ぶとともに、自身のコーディネーションの改善点にも気づくことができました。これらの気づきや学びを通じ、さらなる技術向上に向け、学生スタッフ一人ひとりのモチベーションが高まるなど、その後の活動に活かせる貴重な経験となったと思います。



ボランティアコーディネート研修

## ● 深草学生スタッフ広報誌『ボラゴン』

### ■ 2012 年度法学部卒業 池上 慎平

学生スタッフ在籍中、センターを知ってもらおう広報班で広報誌『ボラゴン』の作成に携わっていました。当時、大学で初めてボランティア活動に参加した際に、自身だけでなく関わった人の人生にも互いに影響し合い、人と人との関わりが社会を少しでも良くしていくということをボランティアから学びました。知っていることと知らないことには大きな差があると思います。自身もたまたま知ったセンターのチラシから、自身が想いもしなかった経験をすることで世界が広がりました。本当に小さく基本的なことかもしれませんが、その第一歩を『ボラゴン』が創り出していくという想いを込めて、当時のメンバーと侃々諤々かんかんかくかくの議論をして作成し、学生スタッフ全員で沢山の学生に届けていました。



深草広報誌『ボラゴン』

## ● 瀬田学生スタッフ広報誌『Volunteer News』

### ■ 2014 年度社会学部卒業 若松 隼平

私が学生スタッフになったのは、入学後すぐに食堂前でもらった広報誌がきっかけでした。以前からボランティアに興味はありましたが、なかなか行動に移せずにいたとき、広報誌を見て純粋に楽しそう、一度話でも聞いてみようかなと思いました。

いざ学生スタッフになってからは、毎号の掲載内容が被らないように学生スタッフの活動内容やボランティア体験談などあらゆる工夫をしました。学内で手配りをして手にとって中を見てくれる人は少数だったかもしれませんが、しかしその僅かな中から、広報誌がきっかけで興味を持ち、センターに来室した人がいた時の喜びは格別なものでした。広報誌には誰かの一步を後押しできる力があると、私は今でも思っています。



瀬田広報誌『Volunteer News』

『ボランティアリーダー育成事業』として、初期は学生スタッフの育成を目的に、NPO・NGOの方からの活動事例を交えたお話や、ワークショップを用いたスキルアップ系の講座などを実施してきました。その後、より全学的に開かれたセンターを目指して入門編『ボランティア入門講座』と応用編『ボランティアリーダー養成講座』に分けて実施し、2014年度からは新たに『ボランティアコーディネーション力3級検定』を取り入れています。

これら課外の取り組み以外にも、正課においては依頼のあった教員の授業（基礎演習など）でセンターの紹介を始めるようになった他、2013年度からは教養教育科目特別講義『ボランティア・NPO入門』をセンター長が担当し、学内の様々な学部教員によるチェーンレクチャー形式で実施しています。

2003

学生スタッフを対象に、『ボランティアリーダー育成事業』を開始。その一環で外部講師のボランティアに関する講座を実施。

2004

同事業の講座を『ボランティアリーダー養成講座』（課外）としてスタート。2008年に『ボランティアリーダー養成講座』と改名して継続。

2005  
2006  
2007

2008

ボランティアリーダー養成講座の入門コースとして、座学とボランティア体験を組み合わせた『ボランティア入門講座』（課外）が全学対象でスタート。両キャンパス合わせて毎年80名前後の申し込みがあり、前期のセンター看板事業となる。

2009



入門講座 講義の様子 (2008年度)



高齢者施設でのボランティア体験 (2011年度)

2010

2011

基礎演習やボランティア関連科目において、センターの取り組み紹介やボランティアについての講義依頼を受け始める。

2012

2013

教養教育科目特別講義『ボランティア・NPO入門』（正課）がスタート

2014

日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)との共催で、『ボランティアコーディネーション力3級検定』（課外）がスタート

2015

2016

2017

2018

2019



ボランティアコーディネーション力検定 (2014年度)



ボランティアリーダー養成講座  
『ファシリテーション研修』(2008年度)

関係団体の声は次ページ

2020年度短期大学部1年生 伊野 涼雅

「とりあえずボランティアをやってみたい」という純粋な興味・関心と、「もっと自己研鑽したい」という大学入学時の思いを抱きつつ、『ボランティア入門講座』に参加しました。オンラインでボランティアの基礎的な事柄を学んだ後の私のボランティア体験は、『京都風緑』という団体の竹林整備活動でした。

竹を切って運ぶという単調な作業ですが、朝から夕方まで一日中身体を動かし、本当に大変でした。しかし、疲労だけが得られるものではありません。この活動がまちづくりも含めた「将来世代の農業」を築くという役目を担っていることを知り、作業後にはやりがいや達成感を得ることができました。

結果として、講義部分でボランティアの基本と考え方を学ぶと同時に、体験でその魅力と意義を肌で感じることができ、非常に有意義な経験ができました。



ボランティア入門講座『ボランティア体験』(2020年度)

2020

新型コロナウイルスの影響により、正課の『ボランティア・NPO入門』、課外では『ボランティア入門講座』の座学部分と『ボランティアリーダー養成講座』をオンラインで実施。入門講座の『ボランティア体験』は、なるべく密を避けるように少人数や屋外の活動を多く取り入れたり、新たにオンラインの活動や医療用ガウン作りなども取り入れ、感染防止対策を講じながら活動した。

## ボランティア体験受入団体の声

「ボランティア入門講座」は、ボランティアの基礎的な考え方について学ぶ講義と地域でのボランティア体験を組み合わせた講座です。2020年度は講義をオンラインで行い、ボランティア体験は感染防止対策を講じながら実施しました。今まで協力いただいた地域団体から、以下の声をいただいています。

### ● 京都市深草児童館

ボランティア・NPO 活動センター設立 20 周年おめでとうございます。京都市深草児童館では『ボランティア体験』の学生受け入れの他に、ボランティア・NPO 活動センターで活動する学生スタッフの皆さんが企画・準備する『サマーフェスティバル』という 8 月の夏休みイベントでも連携しています。ボランティア体験やサマーフェスティバルで子どもと触れ合う楽しさに興味を持った学生さんが、学習補助や遊びの相手としてボランティア活動をしてくれるなど、日々子ども達と関わりを持ってきています。これからもセンターと児童館で連携しながら普段接する機会が少ない小学生と大学生の交流の機会を作っていきたいと考えます。



深草児童館でのボランティア体験 (2010 年度)

### ● 認定 NPO 法人アクセス

#### ■ 事務局長 野田 沙良

海外ボランティアは遠い世界の活動のように思う方もいるかもしれませんが、日本でできることも多くあります。私たちは、フィリピンで「子どもに教育、女性に仕事」を届ける国際協力 NGO です。「自分で働いて子どもを学校に行かせたい」と願うお母さんや、仕事が見つからない若者たちに働くチャンスを提供しようと、フェアトレードのメッセージカードを生産・販売しています。『ボランティア体験』では、フィリピンから届いた商品の袋詰め作業などを担っていただきました。最初は緊張していた学生さんたちも、丁寧に手作りされた商品に触れながら会話を重ねる中で、少しずつ笑顔になっていきました。日本にいながら、フィリピンの人々の暮らしに少し触れていただけたのではないかと思います。



アクセス事務所でのボランティア体験 (2019 年度)

### ● 社会福祉法人 美輪湖の家 大津 障害福祉サービス事業所 瑞穂

設立 20 周年、おめでとうございます。当施設が毎年 6 月に開催している『みずほ祭』に、からあげやカフェコーナー、ヨーヨー釣りや輪投げ等模擬店での販売・接客、駐輪場案内係、会場の片づけ等のボランティアスタッフとしてご参加いただきありがとうございます。来客のピーク時や暑い中でも、元気ハツラツと活躍して下さる学生さん達に、利用者・職員一同感謝しております。他のボランティアスタッフやお客さんからも「学生さん達のおかげでスムーズに販売が出来た」「ゲームコーナーがすごく盛り上がり楽しかった」「または是非来年も参加してほしい」等の声があがっています。毎年多くの方で賑わうみずほ祭は、皆様のご協力のおかげで成り立っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



みずほまつりでのボランティア体験 (2016 年度)

### ● 森の風音

#### ■ 代表 金子 龍太郎 (龍谷大学 社会学部現代福祉学科 教授)

私たちの活動場所は、瀬田キャンパスに隣接する「びわこ文化公園」ですので、センターがボランティア体験を毎年開催して下さることによって、大学と公園とのつながりができてきました。

2020 年度の活動は、公園の森林部分で、間伐して積み重ねていた材木をノコギリで切断して運搬するという重労働でした。私たちの会員は、全員が 60 代以上の高齢者ですので、重い材木を運ぶ作業が十分できないままでした。今回のボランティア体験により林内が片付き、会員一同喜んでいました。また、来園者の皆さんにもきれいになった林内を見ていただけるようになりました。

加えて、学生の力だけでなく、センター職員が同伴して下さるお陰で、学生の作業効率が上がりました。学生の若い力と職員のサポートに感謝いたします。



びわこ文化公園でのボランティア体験 (2020 年度)

学生が夏季や春季の長期休暇を利用して治安・衛生環境が安全と判断される海外を訪問し、その地域が抱える問題に触れるとともに、現地 NPO・NGO などとの交流を通じて課題解決の取り組みなどを学びます。本プログラムでは参加費の一部をセンターが補助するなど、学生が参加しやすい環境を整えつつ、安全で学びの多いものを提供することに努めています。その他にも、本プログラム以外の様々なスタディツアーを知る機会となる合同説明会や、スタディツアーを企画する NPO・NGO や教職員向けのセミナーなどを、関係団体と共催してきました。これらのあゆみと、実施プログラムの様子、本プログラムの関係者や参加した卒業生や現役学生の声をご紹介します。

2003

NGO のスタディツアーから選定し、学生スタッフ研修の一環である海外フィールドワークとして開始。のちに『海外体験学習プログラム』と名称変更し、2019 年度まで毎年欠かさず継続。

2004

2005

2006

参加者を全学対象とする。

2007

学内の教員が引率する「学内企画」をスタート。NGO のスタディツアーから選定するものは「学外企画」と位置づける。

2008

2009

2010

学内で『海外体験学習プログラム報告会』を開始。

関西 NGO 協議会、(株)マイチケット、当センターの三者共催で、スタディツアー合同説明会を開始。のちに『NGO スタディツアー合同説明会』と名称変更して、2019 年度まで継続。

2011

2012

2013

関西 NGO 協議会、(株)マイチケット、当センターの三者共催で、『セーフトラベルセミナー』を開始し、2019 年度まで継続。

2014

2015

2016

2017

2018

2019

学内企画 1 ツアー、学外企画 2 ツアーを予定していたが、新型コロナウイルスの影響により学外企画 1 ツアーのみ実施。

2020

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、海外を訪問するスタディツアーに代わって、NGO と現地のカウンターパートとつないで現状を知る『オンラインスタディツアー』を実施。



2003 年度インドプログラム



2011 年度報告会の様子



2011 年度合同説明会に参加した学生スタッフ

#### 関係団体の声

##### ■ NPO 法人 関西 NGO 協議会 事務局長 高橋 美和子

センター設立20周年、誠にありがとうございます。設立当初、地域の課題だけではなく、海を越えたその先にある世界での貧困、ジェンダー、人権、災害等の問題にも目を向けられ、先駆的なお考えの元、スタディツアー合同説明会、セーフトラベルセミナーの事業を立ち上げ、今まで一緒でできたことは国際協力 NGO にとっても大きな喜びです。

また、全国に先駆けて他セクターとの連携を進められ、社会の課題を自分に引き付けて考え、学び、行動に移していく場を積極的に創られてきたことは、非営利セクターで活躍する人材の輩出につながり、大きな貢献であることは言うまでもありません。ますますの活動の充実を期待しております。



2020 年度オンラインスタディツアーの様子

## 本学教員が企画・引率する学内プログラム

(注) 所属・役職などは当時のものを示す。



2010年度タンザニア『貧困から脱出する道を探る』(引率:経済学部 大林 稔教授)



2013年度フィリピン『フィリピンで学ぶピープル・パワー』(引率:社会学部 笠井賢紀講師)



2017年度インド『教育 NGO の活動事例を通じて、インドの経済成長と社会発展について学ぶ9日間』(引率:経済学部 島根良枝准教授)

### 企画引率教員・団体

#### 政策学部教授 北川 秀樹 (NPO 法人 環境保全ネットワーク京都代表)

ボランティア・NPO 活動センターが設立されてから 20 周年の節目を迎えられたということでまことにおめでとうございます。

私は本学に着任したのは 2002 年ですが、早くからセンター委員に就任していたこともあり、『海外体験学習プログラム』の企画募集に応募し、2007 年度、2008 年度と連続で中国陝西省に学生を引率しました。陝西省は京都府と友好提携を結んでおり、省都の西安市は唐の都の長安が置かれた歴史・文化都市です。1990 年代から 2000 年代は、中国西北部を中心に森林の過伐や過放牧により植被が失われ、水土流失、砂漠化が進行した時期でした。NPO 法人の代表を務め、西安市近郊で植樹協力をしていた関係で植樹体験を企画しました。現地では小学校訪問・交流、大学生との交流、意見交換と人との交流に重点を置きました。短期間ではありましたが現地の文化、食、生活習慣、考え方に触れ、参加学生はマスコミ報道等で描いていたものとは異なるリアルな中国を肌で感じ、視野を広げられたのではないかと思います。友好的、開放的な中国の若者と交流できたことは特に大きな成果でした。しかし、2010 年頃から日中関係が政治的に冷え込んだこともあり、中国へのプログラムは差し控えました。

2016 年度に台湾南部の台南、高雄へのプログラムを企画し、2018、2019 年度と前述の NPO 法人の企画として連続して学生を引率しました。台湾は親日的で、食や文化が魅力的というのが一般的な評価ですが、清朝や日本の台湾統治、戦後国民党政権の戒厳令、民主化への転換と歴史的に大変複雑な過程を歩んできており、事前学習ではこの点の学びに力を入れました。現地では、阿里山の森林、野鳥観察などの自然とのふれあい、歴史博物館や八田與一建設の烏山頭ダム視察、山岳地帯原住民部落の訪問など旅行社ツアーでは訪問できない手作りの日程調整に努めました。また、現地の大学生との交流を通じて、語学力、思考力の高さに本学学生が触れられたことは大きな刺激になったと思います。今年 2 月末のプログラムは新型コロナウイルスの感染が拡大し始めた時期であり、随行する NPO メンバーの中にもキャンセルする人もおり実施が危ぶまれましたが、現地の受け入れ側の配慮もあり無事行程をこなすことができたことを喜んでます。

台湾の大学の方からも指摘がありましたが、学生の体験を支援する大変素晴らしいプログラムだと思います。今後ともセンターのこのプログラムとして継続されることを祈念しています。最後になりましたが、中国での案内でお世話になった呉衛さん(2016 年病気により逝去)、国立成功大学の王毓正先生に心より感謝を申し上げますとともに、上手さんをはじめとしたセンタースタッフの方にお礼を申し上げます。

#### 経済学部教授 松島 泰勝

私は、2008 年 9 月に初めて『海外体験学習プログラム』の引率を始め、パラオを訪問した。在パラオ日本国大使館(私の以前の職場)、JICA パラオ事務所、パラオ政府外務省、パラオ政府観光局等で意見交換を行い、事前学習で学んだことをもとにして、学生が質問を英語で行った。その後、パラオのロックアイランドのエコツアーに参加し、その自然の美しさを体感した後、パラオ国際サンゴ礁センターにおいて、サンゴ礁を初めとする海洋生物の生態的な特徴を学んだ。次に、空き缶リサイクル工場、ゴミ処理場を見学し、島嶼社会における環境問題に対する取り組みについて聞き取り調査した。そして、パラオを代表する PPR (パ



2008 年度中国プログラム



2017 年度台湾プログラム



2010 年度パラオ・グアムプログラム

### 第3章 主なセンター事業のあゆみ●海外体験学習プログラム

ラオ・パシフィック・リゾート) というホテルでの環境対策を調査した。同ホテルでは、飲み水を周辺の森からまかない、汚水も自らで処理しており、徹底した環境政策を行っていた。

2011年2月にはパラオとグアムで同プログラムを行った。グアム大学の学生と意見交換し、グアム商工会議所で同島の経済政策について聞き取り調査をした。その後、在ハガツィヤ日本国総領事館(私の以前の職場)でインタビューをした後、老人ホームで御老人との交流ボランティア、さらにはビーチクリーンアップボランティアを行い、このボランティアに対してグアム観光局から感謝状を頂いた。パラオでは、日本人学校で子供たちと交流をした後、クニオ・ナカムラ元パラオ大統領にインタビューをした。そして、パラオ短期大学の学生と文化交流をした。

2013年8月にグアムとパラオへのプログラムを実施した。グアム先住民族の古代集落跡であるパガット地区は、当初、米軍実弾訓練場建設予定地であったが、地元民の反対運動による計画は撤回された。ベバクア・グアム大学教員の案内で、同地を皆で歩いた。その後、グアム大学でグアムの自立・独立について意見交換を行った。その後、グアムの脱植民地化委員会のアルバレス事務局長にインタビューをし、同局長の自宅においてパーベキューをご馳走になった。

2015年2月のパラオでのプログラムでは、太平洋戦争の激戦地であったベリリュウ島で平和学習をした。同島のオレンジビーチでビーチクリーンアップボランティアを行った後、ナカムラ元大統領と面談・交流をした。パラオ短期大学では、龍大生たちが「よさこいソーラン節」踊りを披露し、龍大職員から寄贈された日本の着物をパラオ人学生にプレゼントした。

『海外体験学習プログラム』において、学生はグアムとパラオの課題と可能性について調べ、発見し、実践することができたと考える。



2014年度パラオプログラム

#### ●参加学生・卒業生の声

##### ■2017年度国際文化学部卒業 余根田 敦(2015年度参加:パラオ)

私は2015年の海外プログラムでパラオを訪れました。本プログラムの参加動機は、パラオが日本と深い歴史的関わりを持っていると知った為です。耳にする事が少なかったパラオとの間に、文化的類似点(言葉や人名)を現地で発見した瞬間は忘れられません。

手つかずの自然を観光資源とするパラオですが、自然保護と産業発展のジレンマを抱えており、小さな国特有の課題を学びました。また、第二次世界大戦で激戦地となった島では、当時の遺構に触れる事で平和の尊さを実感しました。プログラム終了後も、参加メンバーと勉強会やパラオを広める企画を開催した事はいい思い出です。

短い大学生活の中で、体験し、考えてみる時間は限られます。知らない自分の可能性に出逢える機会をぜひ掴んで下さい。



2015年度パラオプログラム

##### ■2020年度農学部4年生 瀬戸山 瑠衣(2018年度参加:台湾)

台湾のプログラムで学んだことの中で印象的なのは、日本統治時代に日本が台湾に与えた影響についてです。台湾の鉄道や港などのインフラを発達させ、多大な影響を与えたことから、台湾の街並みの中にも日本の商品を見かけたり、日本語を話せる人を見かけたりと、現在でも親日であることを実感しました。また、ツアーに同行していた学生の学ぼうとする意識の高さや、NPOの方々の豊富な知識に刺激を受け、自分のスキルアップのためのモチベーションとなりました。

台湾へ行って何かについて完璧に学んだとは思っておらず、これからの学びのきっかけになったと考えています。この貴重な経験を生かして学びを深めていきたいです。



2018年度台湾プログラム

## さまざまな NGO と連携した学外プログラム



2006 年度インド『開発・教育・子ども～経済・社会格差を超える NGO のアプローチ～』  
(NPO 法人アジアボランティアセンター)



2009 年度カンボジア『平和と国際協力を学ぶ』  
(NPO 法人テラ・ルネッサンス)



2011 年度フィリピン『貧困の中で生きる人々と出会い、向き合う旅』(NPO 法人アクセス)



2011 年度ネパール『世界の屋根ヒマラヤの国環境を守るバイオガスプラント支援活動』  
(社団法人アジア協会アジア友の会)



2014 年度スリランカ『仏跡と茶園の旅』  
(NPO 法人 JIPPO)



2018 年度インドネシア『ボルネオ島エコツアー 森の中でのホームステイ』  
(ウータン 森と生活を考える会)

### ■ツナミクラフト代表 東山 高志

マングローブや漁師体験で自然と触れ合い、子どもたちと戯れ、ろうけつ染めなど手仕事に集中する。学生たちはとてもいい顔をしている。ツナミクラフトでは 2011 年度から 5 回、学生たちと 2004 年のスマトラ島沖地震のタイの津波被災地を訪問した。彼らは体験を通して変わっていった。

東日本大震災直後に東北地方から京都に出てきた学生は、同級生を被災地に置いてのうのと京都で暮らしていることに引け目を持っていたが、タイの被災者たちの生きざまを見て前向きに生きると決めた。別の学生は、いままで食べられなかったものが食べられるようになった。別プログラムで石巻市雄勝地区に行った学生は、日本とタイとの復興の違いに愕然とした。学生たちの変化は私の想像を超えた。体験を通して学べる機会を今後とも継続してもらいたい。



2019 年度タイプログラム

### ●参加学生の声

#### ■ 2020 年度政策学部 3 年生 福島 麻斗 (2019 年度参加: タイ)

2004 年のインド洋大津波によって大きな被害を受けたタイは、被災後、迅速に復興がすすんできている。海の近くに津波の避難所を作り、6 か国語で津波の襲来を知らせる警報器の設置をするなど、タイ国民だけでなく外国人も津波から命を守る防災が考えられていた。

今回訪れたタレーノーク村は津波で人口の 3 分の 1 の人々が命を落とすなどの甚大な被害を受けたが、その後村や学校を海から離れた場所や高台へ移転し、地域づくりをすすめている。そこからは村人たちが主体となって津波被害に向き合うという強い意志を感じた。しかし 15 年たった今でも津波による課題が残っているのも事実である。津波犠牲者の墓地には亡くなった人たちの遺体が 300 体ほど冷凍保存された状態のままになっているそうだ。DNA 鑑定を行った結果、違法労働でタイに入国した人だと判明すればその家族が裁かれるという事情からどうすることもできないという現状がある。

15 年たった今でも災害の爪痕が悲しい形で残っているという、つらい現実が胸が塞がった。

### 第3章 主なセンター事業のあゆみ●国内体験学習プログラム

海外に比べて費用面でも参加しやすい国内において、地域の様々な課題に目を向け視野を広げることを目的に実施しています。こちら当初は学生スタッフ向けにボランティアリーダー育成事業の一環で位置づけられてきましたが、より多くの学生に学びの機会を提供するため、現在は全学対象にしています。本学教員の企画・引率や学外企画のツアーなどからさまざまなプログラムを選定してきましたが、ここ数年は学生の興味関心が高い福島や、身近な地域のまちづくりについて学ぶ滋賀のツアーを実施しています。

**2002** 学生スタッフの研修の一環で「国内合宿」を実施。

**2003** 夏に「国内研修」、春に「海外フィールドワーク」（海外体験学習プログラムの前身）を学生スタッフ研修の一環としてスタート。国内では沖縄や屋久島を中心に両キャンパスで毎年交互に訪れ、平和・環境問題などを中心に学ぶ。（～2007年度）

2004

2005

2006

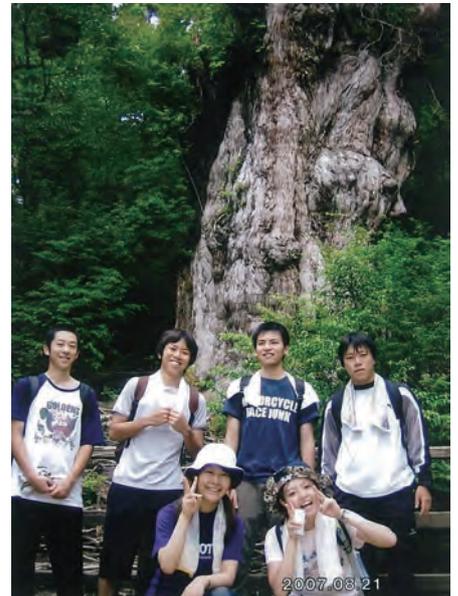
2007



2008年度岐阜研修（深草）



2006年度沖縄研修（瀬田）



2007年度屋久島研修（深草）

**2008** それまでの沖縄・屋久島から、岐阜（まちづくり）や広島（平和・福祉・環境）、兵庫（災害）など、学生スタッフの関心に応じて行先やテーマも多様化。（～2009年度）

2009

**2010** 学生スタッフの国内研修を、学内教員が企画・引率する『国内ボランティア体験プログラム』として設置し直し、参加対象を全学に広げて実施。



2009年度兵庫研修（瀬田）

2011

**2012** 名称を『国内体験学習プログラム』と変更し、学内教員の企画・引率で本格的にスタート。

**2013** 教員引率企画の他、NPOなどのプログラムを取り入れる「学外企画」も導入。

2014

**2015** 社会学部筒井教授の企画・引率する『福島スタディツアー』を、センターのボランティアコーディネーターも同行して開始。（2019年度まで毎年訪問）

2016

**2017** センターのボランティアコーディネーターが企画・引率する『滋賀スタディツアー』を開始。2017-2018年度は高島市、2019年度は近江八幡市と甲賀市を訪問。

2018

2019

**2020** 福島スタディツアーで訪問した団体とオンラインで繋ぐ『つながる福島ワークショップ』、および滋賀スタディツアーは日帰りで『近江八幡の左義長祭 ～コロナ禍において伝統文化の継承について考える～』を実施。



2010年度『国内ボランティア体験プログラム（滋賀）』（引率：法学部 谷垣岳人講師）の様子

プログラムの様子・  
参加学生の声は次ページ



2020年度日帰りで実施した近江八幡プログラムの様子

今まで実施した国内体験学習プログラムの中から、訪問先での学生の様子と、ここ数年継続して訪問していた福島と滋賀のスタディツアーに参加した学生スタッフの声ををご紹介します。



2012 年度沖縄『平和と多文化共生について学ぶ』  
(引率：経済学部 松島泰勝教授)



2013 年度鳥取県智頭町『過疎の山村再生と、魅力的なまちづくりを学ぶ』  
(引率：政策学部 清水万由子講師)



2015 年度丹後『丹後に会おう』  
(プログラム元:NPO 法人京都デザインスクール他)



2014 年度富山県五箇山  
『合掌の里グリーンツーリズム体験』  
(プログラム元：認定 NPO 法人 JUON NETWORK 他)



2016 年度福井  
『ふくいエコ・グリーンツーリズム体験』  
(プログラム元：NPO 法人森林楽校森んこ 他)

### 福島スタディツアー参加学生の声

#### ■ 2020 年度文学部 2 年生 早川 歩伽 (2019 年度参加)

私がこのツアーに参加したのは、被災地の今を自分自身の目で見て、現地の人々の生の声を聞きたいと考えたからです。初めて訪れた福島県では、9年たった今でも震災の爪痕が色濃く残っていました。津波の被害を受けた地域を目にした時はどこまでも広い田畑が広がる光景に言葉を失いました。福島県は地震、津波の被害だけでなく原発による影響も受け、まだ今も帰還困難区域があります。様々な場所で目にした汚染土を入れた土のう袋はその数に恐怖すら感じました。今回私が目にした被災地は至る所で様々な工事が行われており、復興に向かって進んでいると感じられましたが、その一方でまだまだ沢山の課題があります。このツアーでは沢山の被災者の方から貴重なお話をお聞きし、自分の無知さを痛感しました。このツアーを通して、私がこれからできることは聞いたこと、見たこと、学んだことを自分の周囲の人々に伝えるということであると考えています。



2018 年度福島スタディツアー  
(引率：社会学部 筒井のり子教授)  
農園の取り組みについてお話を聴いている様子

### 高島スタディツアー参加学生の声

#### ■ 2019 年度農学部卒業 橋本 昌尚 (2017 年度参加)

私はこの体験を通して、自分の固定観念や地域に対するイメージが変わったと実感しています。特に、地域住民が自ら活動することの大切さについてです。

参加する前は、地域の活性化や課題解決は行政が行うものだという考えを持っていました。しかし訪れた滋賀県高島市では、地域住民や移住者の方々が、高島の魅力を伝える活動や地域の課題解決を行政とともに取り組んでいることを知り、その考えが変わりました。

地域をより良くしたいと考え、行動しているのは行政だけでなく、生活している住民も協働しているのだと実感することができたプログラムでした。



2017 年度滋賀県高島市スタディツアー  
(引率：國實紗登美コーディネーター)  
琵琶湖での漁業体験の様子

### 第3章 主なセンター事業のあゆみ ● 災害復興支援活動

多くの災害が発生した 2004 年以來、大規模災害の度に学生や関係団体・部署と協議しながら、募金活動や復興支援活動に取り組んできました。2011 年の東日本大震災以降は、龍谷大学が復興支援に関わるプロジェクトチーム (PJ) の事務局として、その後の支援活動や他の災害が発生するたびに PJ で協議しながら進めています。また、各地の災害ボランティアセンターが募集する復興支援活動への協力や、学内者向けに災害ボランティアに必要なグッズの貸し出しなども行っています。

2004

北陸豪雨被災者支援 緊急タオルアクション  
台風 23 号災害ボランティア  
新潟県中越地震募金活動・災害ボランティア  
インド洋大津波 (スマトラ沖地震) 募金活動



北陸豪雨緊急タオルアクション (2004 年度)

2005  
2006

2007

新潟県中越沖地震復興支援にかかる各種取組  
[募金活動、災害ボランティア]



中国四川省大地震募金活動 (2008 年度)



台風 23 号災害ボランティア (2004 年度)

2008

ミャンマーサイクロン募金活動  
中国四川省大地震募金活動

2009  
2010

2011

東日本大震災復興支援にかかる各種取組  
[募金活動 (被災地支援/活動学生への支援)、東北物産品販売復興支援ボランティア 5 回、復興支援フォーラム]

東日本大震災復興支援の取り組み  
・参加学生の声は次ページ

2012

宇治市豪雨災害ボランティアへ協力  
東日本大震災復興支援にかかる各種取組  
[復興支援ボランティア 2 回、復興支援フォーラム]



ネパール地震募金活動 (2015 年度)

2013

台風 18 号災害ボランティアへ協力  
東日本大震災復興支援にかかる各種取組  
[復興支援ボランティア 3 回、復興支援フォーラム]

2014

東日本大震災復興支援にかかる各種取組  
[復興支援ボランティア 3 回、震災を語り継ぐモニュメントの設置]

2015

ネパール地震募金活動  
東日本大震災復興支援ボランティア 2 回

2016

熊本地震にかかる各種取組  
[募金活動、復興支援ボランティア 2 回]  
東日本大震災復興支援ボランティア 1 回



熊本地震ボランティア (2016 年度)

2017

東日本大震災復興支援ボランティア 2 回

2018

平成 30 年 7 月豪雨にかかる各種取組  
[募金活動、復興支援ボランティア 1 回]  
東日本大震災復興支援ボランティア 2 回



岡山県真備町での豪雨災害ボランティア (2018 年度)

2019

東日本大震災復興支援ボランティア 2 回

2020

東日本大震災復興支援フォーラム 発災から 10 年  
～あらためて震災を振り返り、その経験を「知恵」とする～  
をオンライン (Zoom) で開催

## 東日本大震災復興支援ボランティアと学内での取り組み

※詳しくは、『龍谷大学 東日本大震災復興支援ボランティア活動報告書（2011年～2020年）』をご覧ください。



卒業式での募金活動（2011年3月）



第1回復興支援ボランティア（2011年6月）



学内で東北物産品販売（2011年12月）



雄勝の地場産業の硯石スレートを磨く作業  
（2012年9月）



仮設商店街『おがつ店こ屋街』イベント協力  
（2014年11月）



大川小学校で当時のお話を伺う（2015年10月）



雄勝湾灯籠流し（2016年8月）



雄勝小学校・中学校併設校の大運動会  
（2017年9月）



雄勝ローズファクトリーガーデンの整備  
（2018年9月）

### 復興支援ボランティア参加学生の声

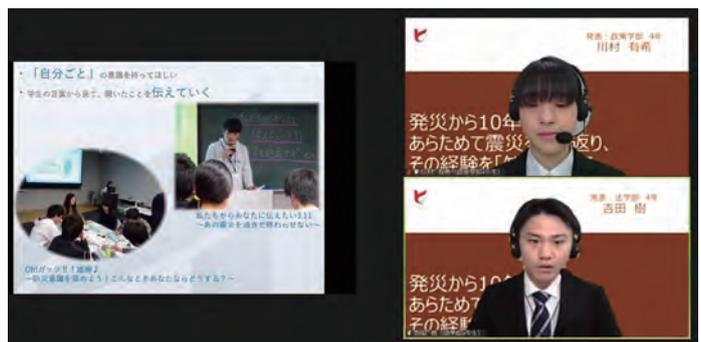
#### 2020年度政策学部4年生 川村 有希

私は、2017年度から3回雄勝を訪れました。毎年訪れた理由は、「雄勝に来るのを1度で終わらせてほしくない」「復興とは何か」という、私にとって忘れられない、考えさせられる2つの言葉に出会ったからです。雄勝の状況や1年ごとに変わっていく風景を見てきて、この言葉を仰った方の想いや背景が思い浮かぶからこそ、私の中で「雄勝」という存在が大きくなっていったのだと思います。

また、私たちに震災当時のことをお話いただくタイミングや、私たち自身の聴く姿勢によって、話の内容をより深く感じられるということにも気づきました。私にとって雄勝は新たな発見がある場所であり、毎年訪れ続ける事の大切さを教えてくれた場所です。



雄勝小学校児童が避難した裏山での防災教育  
（2019年8月）



東日本大震災復興支援フォーラムをオンライン（Zoom）で開催（2021年2月）

### 第3章 主なセンター事業のあゆみ ● 学内でのボランティア啓発

ボランティアの裾野を広げることを目的に、学内において社会課題に気づけるようなイベントや出張ボランティア相談会、各種啓発展示などを学生スタッフが中心となって数多く実施してきました。両キャンパスの取り組みのほんの一部ではありますが、関わった卒業生スタッフや関係者の声をここで紹介します。

#### 市民活動団体の合同説明会やセンター利用促進の取り組み



ボランティア・市民活動相談会 (2002 年度)



出張ボラセン in 大宮 (2011 年度)



ボランティア募集団体合同説明会  
～あなたもレッツ!ボラデビュー～ (2014 年度)



サークル情報交換会拡大版!つながり～サークル  
同士の輪～ (2016 年度)



アタックボラセン (2017 年度)



収集ボランティア (2018 年度)

#### ● Let's ボランティア

##### ■ 2014 年度社会学部卒業 政丸 由香 (旧姓: 藤村)

『Let's ボランティア』は、私がボラセンを知ってもらうために力を入れていた活動の一つです。チラシを配らずにテーブルに置いたり、手持ちアンケートを導入したり、積極的に新しい方法に挑戦しました。アンケートではボランティアへのハードルを下げるような楽しい質問もプラスすると注目してもらえ、私たち自身のモチベーションアップにも繋がりました。友達から「ボラセンってよく外にブース出してるよやんな?」と言われた時は、一歩前に進めたようでとても嬉しかったのを覚えています。仲間と様々なアイデアを出し合ったあの時間は、今でもかけがえのないものです。これからも学生スタッフには、ボラセンを通してたくさんの人にボランティアの輪を広め、仲間と企画を創り上げることで充実した濃い時間を過ごしてもらえんことを願っています。

2008～2019年度まで瀬田キャンパスでボランティア促進のため毎年実施している学生スタッフ企画。



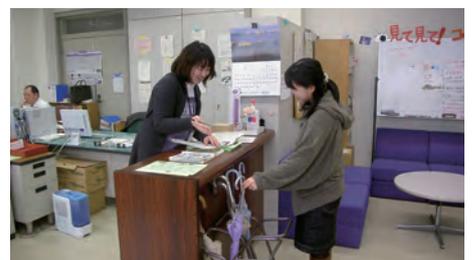
2015 年度の様子

#### ● リユース傘貸し出しプロジェクト

##### ■ 2011 年度法学部卒業 横関 つかさ

活動当時は、本プロジェクトを「センターの認知度向上の機会」という発想でしか捉えていませんでした。しかし、今改めてふりかえてみると、傘の貸出時の対応は紋切り型の事務的な対応ではなく、「この傘かわいいですね」や、「見た目はちょっと古いけどこっちの方が頑丈ですよ」など、借りる傘を選ぶ学生とのちょっとしたやりとりがありました。些細なことですが、この積み重ねがボランティアコーディネーションの場面で相手との自然なやりとりや会話の幅を広げるトレーニングの場にもなっていたように思います。今活動している学生スタッフにも、本プロジェクトをそういう視点から捉え、今後の活動に活かしてもらえれば嬉しいです。

学生部から譲り受けた学内の忘れ物傘を突然の雨の時に貸し出し、借りに来た人にセンター事業などを広報し活用促進をはかる。2006年度に深草で始まり、2017年度から瀬田でも開始。



2009 年度 傘貸し出しの様子

## さまざまな社会課題をテーマにイベントを実施



Big Issue 講演会～ホームレスと若者～  
(2007 年度)



STAR (Save The Animal from Ryukoku)  
小さな命のモノガタリ  
—知らない表情がここにある— (2016 年度)



子ども食堂を広げよう (2018 年度)

### ● 出会は priceless！ 補助犬から考えるみんなのまちづくり (2004 年度実施)

#### ■ 2006 年度社会学部卒業 那須 麻利子

補助犬シンポジウムを開催するにあたり、我々も補助犬ユーザーとの事前打ち合わせを通して、補助犬について一から学ばせていただきました。障がいの異なるユーザーそれぞれに寄り添う補助犬は、目となり耳となり、手足となってユーザーの当たり前前の生活を支え、ユーザーが一人でクリアできない部分を補う欠かせない存在であることを知りました。一方、決して万能ではなく、補助犬だけに頼る生活の難しさも感じ、やはりハード、ソフト両面のバリアフリーの整備が必要だと感じました。当事者にしか分からない事もたくさんあります。このシンポジウムは、経験談からその方の置かれた状況を想像し、気づき、課題を考える、良いきっかけになったように思います。

身体障害者補助犬法が施行されてから間もなく 20 年になりますが、補助犬への理解はまだまだ十分ではないように感じます。実際に見聞きする機会が定期的に持たれ、補助犬への理解が深まることを願っています。



シンポジウムの様子

### ● 生きるぼくら～ボランティアから共生を見つめる～ (2017 年度実施)

#### ■ 2018 年度法学部卒業 日野 萌絵子

「自分とは関係ない」と思いがちな障がいについて、身近に感じてもらうための企画を考え、本学学生へ向けて『ボランティアサークル プラネット』メンバーの皆さんや保護者の方、サポートする方などからお話いただきました。障がいのため電車の中で座らず動き回っている様子を見たとき、その特性を知っていると知らないのでは受け取り方が違う。偏見の目で見るとは、落ち着いたことがあったのかな」など、理解しようとする。そのようにして理解者を増やしていくと、皆が生きやすい社会になるのだと改めて感じました。参加者には「まず理解することが大切」と伝えると同時に、「家族はしんどそう」などのマイナスなイメージを少しでも変える良いきっかけになったと思っています。



メンバーの親御さんからお話を聴いている様子

#### ■ ボランティアサークル プラネット 代表 堀田 ともみ

障がいがあっても充実した余暇を過ごして欲しい!いろいろな事を経験して素敵な思い出を作って欲しい!プラネットは、障がいのあるメンバーの余暇支援サークルとして活動を続け、13 年目を迎えました。貴センターを通じて、これまで数多くの学生ボランティアに参加頂き、活動を支えて貰っています。『生きるぼくら』では、障がいを持つ我が子を育てる中で思い悩んだ日々、障がいを受け入れ共に歩むこと、サークル活動の必要性などをお話する機会を頂きました。障がいのある人と学生さんの間には、目には見えずともとても高い壁があります。学生スタッフがそれに気付いて、何とかしてその壁を取り除こうとしてくれた事にとっても感動し、感謝の気持ちで一杯になった事を覚えています。これからも末永く、メンバーとの思い出作りにご協力頂けると嬉しいです。

国際分野のイベントや講演会・ワークショップ



NGO フェスタ in 関西 (2005 年度)



国際協力コンソーシアム  
～関西の NGO をつなぐ～ (2007 年度)



もし世界が 100 人の村だったら (2008 年度)



フェアトレード講演会 (2008 年度)



滋賀県多文化共生ボランティア説明会  
(2009 年度)



世界丸見え! あなたとつながる貧困問題  
(2010 年度)

● <sup>みらい</sup> 明日の子どもたちに笑顔を～世界を変えるための一歩を一緒に踏み出しませんか?～ (2009 年度実施)

■ 2011 年度経済学部卒業 藤澤 良介

『僕は 13 歳 職業、兵士。』アフリカで子どもたちが兵士として戦場に立たされている現実があることを伝える 1 冊の本との出会いがきっかけとなり、勉強会から講演会へと一連の企画が動き出しました。これから社会を担う学生に子ども兵の現実を知ってもらうことが、後々世界を変えていくんだという想いを込めた、学生スタッフ活動の集大成でした。振り返ってみると良くも悪くも学生らしいまっすぐで熱く、未熟なことも多かった企画でしたが… 学生時代の全力をぶつけ、企画を形にしていく過程で、関わった学生スタッフには多くの変化と成長がありました。この企画に携わった同世代の学生が今、それぞれのフィールドで活躍することで、何か少しずつでも世界が変わっていれば嬉しく思います。



NPO 法人テラ・ルネッサンスへ託した  
講演会参加者メッセージ

災害復興や防災・減災を考える展示とワークショップ



グローバルなワークでワクワク!～震災から多  
文化共生を Thinking ～ (2011 年度)



Oh! ガッツ! 雄勝♪～雄勝の今を伝えたい～  
(2014 年度)



私たちがあなたに伝えたい 3.11 ～あの震災を  
過去で終わらせない～ (2018 年度)

※これらの他にも、龍谷祭の中で数々の展示やワークショップを実施しています。

## 龍谷祭での展示と模擬店

### ● 深草龍谷祭

#### ■ 2014 年度文学部卒業 峰松 優丞

ボラセン 20 周年おめでとうございます。私が卒業してから 6 年が経とうとしていて、今回の寄稿のため久しぶりに昔の報告書を開きましたが、本当に懐かしいです。特に 2 年生の時の龍谷祭はとても印象的で、初めて同級生たちと中心に企画したものでした。ミーティングを進めても、経験の浅い私たちは全くアイデアが思い浮かばない…。ぼんやりと「面白いことがやりたいなあ」こんな感じのことを考えていました。それで出来たのが「迷路の展示」でした。教室全体を迷路にしてそこに活動報告を散りばめるといもので、当日はとにかく子どもたちがたくさん来て走り回っていた思い出があります。

毎年龍谷祭の展示は大変ですが、仲間たちと悩んだり夜遅くまで準備したりと、今になって思えば私にとって「青春」を感じる企画でした。



2012 年度 深草龍谷祭展示  
『私 x ボランティア ~ ボランティアランドへようこそ ~』



2010 年度展示『アフターショック  
~ 災害ボランティア・私たちにできること ~』



2013 年度の模擬店収益は東北へ寄付



2019 年度展示  
『学びを発掘! ~ ボラセンミュージアム ~』

### ● 瀬田龍谷祭

#### ■ 2013 年度国際文化学部卒業 菱本 柚香

龍谷祭で企画をしたいと思った 1 年生の時、私自身がボラセンや学生スタッフの活動をもっと知りたいというところから始まりました。自分たちが知ること、他の学生にボランティアの魅力を伝える、という学生スタッフの役割の手助けになるといいなあと思ったからです。その年の瀬田龍谷祭は台風で中止となりましたが、作った展示物は 10 周年事業で活かすことができました。

また、その後発生した東日本大震災について、「震災を風化させない」という思いもずっと持っていました。継続的に支援することに繋がればと思い、2 年生では震災ボランティアの報告や交流する場、東北のご当地グルメの出店を考えたのを思い出しました。龍谷祭を経験して、自分 1 人では難しいことも他の学生スタッフと一緒に知恵やアイデアを出し合うことで形にできるのだと実感出来たことは、私の中での大きな財産になっています。



2011 年度 瀬田龍谷祭での模擬店収益は、展示会場に設置した募金箱で集まった額と合わせて東北へ寄付



2008 年度展示  
『龍谷で出会うもうひとつのアート展』



2012 年度展示  
『Do you know ボラセン? in 瀬田龍谷祭』



2017 年度展示『零から始めるボランティア  
~ 下から見るか、横から見るか? ~』

### 第3章 主なセンター事業のあゆみ ● 近隣地域での活動 (深草キャンパス)

ボランティア・NPO 活動センターでは、地域の様々な団体や行政と連携し、学生の学びだけでなく地域貢献にも繋がる活動に取り組んできました。特に、ボランティアに関心はあるけれども参加経験が少ない学生たちへ向けて、学生スタッフが中心となって地域と繋がる活動のきっかけとなるようなボランティア企画を提供しています。設立以来、たくさんの学生スタッフ企画が実施されたうち、深草キャンパスの取り組みの一部と、関わった卒業生スタッフの声をここで紹介します。

#### ● 伏見区野宿者支援プロジェクト

##### ■ 2009 年度法学部卒業 藤原 西児

NPO 法人 JIPPO の取り組みにボラセンが協力する形で始まった『伏見区野宿者支援プロジェクト』に、2008 年末から 2009 年末頃まで参加しました。リーマンショック後の不景気で、野宿生活者の方が伏見区の東高瀬川・西高瀬川・山科川の河川敷に増えていました。このプロジェクトの発起人であり、ボラセン初代センター長で当時 JIPPO 代表だった中村尚司先生や、深草ボラセンのコーディネーター竹田純子さんが野宿生活者の方々に日々の生活や困りごとを聞かれた後、食料や銭湯のチケットを渡すのが私の役割でした。

その中で、野宿生活者の F さんは中村先生のサポートもあり、生活保護を受給することができました。その後、私がインドの旅行社へ就職が決まり、F さんが移り住んだ新居でみなさんと鍋を囲んでお祝いしていただいたことは今も心に残っています。

2008 年度：NPO 法人 JIPPO 実施の河川巡回協力を学生スタッフと CD で冬に開始  
2009 年度～：  
通年の取組みとして随時学内募集  
2010～2015 年度：河川巡回の他、居宅訪問や関連イベントなどへも参加



河川巡回活動 (2009 年度)



野宿者支援勉強会 (2009 年度)



支援物資の準備 (2011 年度)



支援団体ネットワークの野宿者支援もっちり大会 (2014 年度)

#### ● 深草児童館との関わり

##### ■ 2017 年度法学部卒業 新川 貴大

私が学生スタッフになって初めて企画メンバーとして関わったのが、『サマーフェスティバル』でした。深草児童館の子どもたちに、学生スタッフ手作りの遊びで夏休みの楽しい思い出を作ってもらおうというものです。遊びの内容を考えたり、準備をするのに何度もミーティングを重ね本当に大変でしたが、子どもたちがとびぎりの笑顔で遊んでいる姿を見たときは本当に嬉しかったです。卒業後も後輩たちが続けてくれており、とても嬉しく思っています。この企画は初めてボランティアに参加する人にとっても参加しやすいものだと思うので、これからも学生スタッフの企画が龍大生にボランティアに関心を持ってもらう存在になればいいと思います。

2009 年度：『Young☆Star』  
2010 年度：『ボランティア体験』  
2013 年度：『防災劇と防災グッズ作り』  
2014～2019 年度：『サマーフェスティバル』  
2020 年度：『ボランティア体験』



サマーフェスティバル (2014 年度)



Young ☆ Star (2009 年度)



防災劇と防災グッズ作り (2013 年度)



サマーフェスティバルで使う竹水鉄砲の準備 (2018 年度)

●『深草ふれあいプラザ』ボランティア

■ 2014 年度政策学部卒業 小松 茂樹

私に関わった時の『深草ふれあいプラザ』では、伏見区役所深草支所と協働で、地域の方々の防災意識を高めることを目的とした防災展示を実施しました。

出展に向けて伏見区役所担当者や企画メンバーと何度も何度も打合せを行った期間は、私自身初めての企画責任者ということもあって様々な苦労がありました。非常に充実していました。

何よりも嬉しかったのは、イベント当日に防災展示の人形劇を見に来てくれた子どもたちが、とても楽しんでくれていたことです。

自分でも地域の役に立てるという実感が得られた初めての瞬間でした。この経験がその後のボラセンでの活動だけでなく、社会人となった今でも生きています。

■京都市伏見区深草支所 地域推進室まちづくり担当

『深草ふれあいプラザ』は、日々地域で活動されている自治連合会などの各種団体の方々が主体となって開催しているお祭りです。子どもからお年寄りまで誰もが参加でき、毎年約 15,000 人もの方々が来場者があります。このような大規模なお祭りをより活気あるものにし、円滑に運営していくためには若者の力が不可欠です。お祭りを通じて地域間の絆が深まるだけでなく、高齢者や大学生等の世代間交流は相互理解や文化の継承など地域の活性化にもつながります。龍谷大学のボランティアの皆様には、地域の方々との交流を通じて、まちづくりの在り方を学んでいただくとともに、地域活動に積極的に関わっていききたいと思えるきっかけづくりにしていただけると幸いです。

2011年度～：防災啓発ブース出展  
2014年度～2019年度：センター紹介ブース、子ども向け遊びのブース、ステージ進行補助、模擬店、その他ブースのお手伝い



防災展示ブースでの人形劇 (2012 年度)



龍大ボラセンブース内部の準備 (2011 年度)



ゆるキャラと子どもたちの交流ステージを運営 (2014 年度)



看板を持って行列の目安に (2016 年度)



ごみ分別のブース (2019 年度)

●南宇治中学校部活支援ボランティア

■ 2010 年度法学部卒業 清水 麻未

当時、中学校でのボランティア活動というと、学習支援は多数あれど部活動支援は珍しかったので、「勉強を教えるのは不安だけど、経験のある部活動なら」と思ったのがこのボランティア企画に関わるきっかけでした。参加学生の中にはずっとスポーツを続けている人もいたので、しっかり技術面を教えていて、その指導を受けている中学生の姿が印象的でした。私の場合、技術を教えるというより、普段関わりが少ない中学生と話したりすることが楽しかったです。

他の先生とも保護者とも違う大学生のボランティアは、多感な中学生にとって時に話しやすい存在であったり、気軽に接することの出来る存在になり得るのかなと思いました。企画メンバーとしてもミーティングで内容を考えたり、様々な広報を行なったことは良い経験となりました。

2005年度：後期に2回実施  
2006～2008年度：  
前期・後期に各1回実施



野球部員と一緒に撮影 (2008 年度)



軟式テニスの技術指導 (2007 年度)

● 『南区民ふれあいまつり』 子ども向けブースの出展

■ 2016 年度法学部卒業 松本 奈子 (旧姓: 岩本)

『南区民ふれあいまつり』は、京都の東寺で毎年秋に開催されているお祭りです。そこで子ども向けの遊びのブースを出す学生スタッフ企画のメンバーとして、2015-2016年に活動しました。どんな子でも楽しめ、歴史ある東寺に合うブースにしようと企画メンバーで沢山話し合いました。2015年は弓矢の的当てゲームと、小さい子でも楽しめるよう好きな色でミサンガを編むブース、翌年はボールの的当てゲームと、好きなパーツを組み合わせてお面を作るブースに。学内でボランティア募集も行い、関心を寄せてくれた龍大生が申し込んでくれました。

お祭り当日は予想以上に沢山の子も達が遊びに来てくれ、一生懸命作り上げたブースで楽しそうに遊んでいる姿を見て、とても嬉しかった事を今でも覚えています。お祭りのボランティア企画に関わられた貴重な経験と、ゼロから仲間とブースを作り上げた達成感や喜びは私の宝物です。

2015～2019年度まで実施



龍大ブースの受付カウンター (2016 年度)



景品に折り紙の手裏剣を準備 (2015 年度)



手作りの的当てブース (2015 年度)



紙皿を使った工作ブース (2018 年度)

● 『ふかくさ 100 円商店街』 との関わり

■ 2014 年度経済学部卒業 後迫 治基

私が企画責任者として最も尽力したことは、地域ボランティアの面白さを伝えるきっかけをつくることにありました。日々の活動を通じ、私は龍大生と地域の隔りについて勿体なさともどかしさを感じていました。実際に体験してみない事には知り得ないこと、感じる事、伝わらないこと。それらをこの企画を通じ、学生に感じてもらいたかったのです。

このボランティア企画が数年続いたのは、ひとえに協力して下さった関係者の皆様方、後に続いてくれたボラセンスタッフのおかげであると強く感じます。既に7年の歳月が流れていますが、現在もこの商店街イベントは行われていると聞き及び、大変嬉しく感じています。機会がありましたら、是非深草商店街に足を運んでみて下さい。魅力盛りだくさんなお店と人が歓迎してくれますよ!

2011年度:『ボランティア入門講座』のボランティア体験先に  
2011～2013年度:学生スタッフ企画として学内でボランティア募集して参加  
2014年度:『プチふかくさ100円商店街』に学生スタッフ企画で参加



新聞紙スリッパ作りブース (2013 年度)



『ボランティア入門講座』ボランティア体験 (2011 年度)



ロン君とくまモンを紹介 (2012 年度)



ぬり絵ブース (2014 年度)

瀬田キャンパスにおいても、センター開設当初から続く最長ボランティア企画をはじめ、大津市内や滋賀県内で活動する体験企画を学生スタッフが提供してきました。また、学生スタッフ自身も、地域の団体や行政からの協力依頼に対し積極的に関わり、ボランティア活動の裾野を広げるように心がけています。ここでは、瀬田キャンパスの取り組みの一部と、関わった現役・卒業生スタッフの声をここで紹介します。

#### ●丸屋町商店街との関わり

##### ■2011年度社会学部卒業 伊藤 ゆかり(旧姓:笠間)

私は2009年度の『ナカマチ商店街夜市 in 丸屋町』で、学生スタッフと一緒に活動するボランティアを学内募集する企画のリーダーになりました。夜市に私たち龍大生が参加することによって地域貢献がしたい、そして他の学生が地域とつながるきっかけづくりをしたいという想いから、この企画に携わりました。

当日は大盛況!商店街の方からは、「若者の力は頼りになる」といった声が聞かれ、参加した学生からは、「地域の様々な世代の方と交流できた」という声が聞かれました。

私はこの企画を通して、人と人とのつながりの大切さを学ぶことができました。人と人が直接関わる機会が減少している世の中ですが、地域社会を守るためには人の力が必要だと改めて感じました。

みんなで意見を出し合い協力し、ひとつの企画を成功させた経験は、社会人になった今でも活かされていると感じています。

2004年度～:学生スタッフが『夜市』ボランティアをスタート  
2006年度:秋の商店街イベントにも協力  
2007～2012年度:  
学内でのボランティア募集や、サークルにも呼びかけて夜市に参加  
2013～2014年度:夜市の他、『大津100円商店街 in 丸屋町』にも参加



かき氷のブース(2010年度)



学内のよさこいサークルも協力(2013年度)



大津100円商店街 in 丸屋町(2014年度)

#### ●大津市内の各種イベントでのボランティア

##### ■2018年度理工学部卒業 仲上 昂希

私たちは、龍大生にボランティアへの興味・関心・理解を広め、やりがいを感じてもらうきっかけづくりとして、『こどものまちおおつ』というイベントへ協力参加するボランティア企画を立案しました。参加学生には「子どもたちと交流する」という活動の形を知ってもらえただけでなく、関わっておられた地域団体のみなさんとの交流を通して、「地域貢献できること」や「つながりを広げていけること」を知ってもらえたと感じました。また、企画メンバー自身も大学生ならではのアイデアをボランティアに活かせることや、主催者の方々とお話しする中で、ボランティアに対する考えをより深めることができたと思っています。

2015～2016年度:  
『こどものまちおおつ』『子どもミュージアム in 石山商店街』に参加  
2016年度:上記2イベントに加えて『大津ジャズフェスティバル』にも参加



子どもミュージアム in 石山商店街(2015年度)



こどものまちおおつ(2015年度)



大津ジャズフェスティバル(2016年度)

● 『防災・減災そなえパーク』へのブース出展

■ 2020年度農学部3年生 渡中 新太郎

1年生の通学時に大阪北部地震に遭遇し、駅にいて一人で何もすることができませんでした。その経験から、災害が起こった際にできることを周りの人達にも知ってもらいたいと思い、『防災・減災そなえパーク』にブース出展する企画長となりました。

このイベントへのボラセンの参加は、「瀬田のまちを知り、繋がりを深める」という趣旨の『コミュニティ企画』として継続してきましたが、これを機に「防災減災を考えること」を第一目的として進めることにしました。企画長として会議で企画提案を行いました。その練習をしなかったために提案は大失敗となり、私の根拠のない自信は崩壊しました。このことで事前の準備が大切だと学べたり、企画メンバーからも「もっと頼って」と言われたり、みんなに支えられているということにも気づきました。

2019年度のそなえパークは、コロナウイルスで中止になってしまい、私は人生で初めて悔し涙を流しました。ですが、それだけ本気で挑むことができたボランティア企画だったのだと思います。

2014年度～：『コミュニティ企画』の一環でブース出展などをスタート  
2018年度：企画名や目的を変更し、本イベントへの参画に特化



防災バッグづくりのブース (2016年度)



復興支援活動や防災に関する展示 (2014年度)



学内でのボランティア募集活動 (2018年度)



災害時の簡易グッズを作る体験ブース (2018年度)

● 障がい者スポーツに関する企画

■ 2020年度理工学部4年生 中川 和謙

『ボランティア入門講座』でスペシャルオリンピックス (以下、スペオリ) の大会運営補助に参加したのが、初ボランティアでした。障がい者と関わるのも初めてで不安が大きかったですが、試合を見ていると競技が本当に上手で驚いたり、障がい者の方から話しかけてくださり、仲良くすることができました。私はこの活動を通して自分自身が障がい者との間に勝手に壁を作っていたことに気づき、障がいへの意識が少し変わりました。

そしてこの経験をきっかけに、他の学生にも障がい者と共にスポーツを楽しむ、障がいに対するイメージを変えてほしいと思うようになり、スペオリの企画メンバーになりました。企画を進めるにあたって一緒に話をする中で、私達が当たり前でできることが障がい者にとってはそうではないと気づき、相手の立場に立つことの大切さを実感しました。

2004年度：  
『みんなでつくろう!!～スペシャルオリンピックストーチャラン滋賀INおおつ』に参加  
2016年度：  
『Enjoy! スポーツボランティア』  
2017～2019年度：  
『スペシャルオリンピックスを知ろう!』



みんなでつくろう!!～スペシャルオリンピックストーチャラン滋賀INおおつ (2004年度)



Enjoy! スポーツボランティア (2016年度)



スペシャルオリンピックスを知ろう! (2018年度)

●『くさつ子どもフェスタ』ボランティア

■2014年度国際文化学部卒業 歌藤 智弥

『くさつ子どもフェスタ』は、大人や子ども、地域の多くの方々から来ています。学生スタッフとして実行委員会の場にも出させて頂き、地域を作る方々の力強さを実感しました。大人も子どもも真剣に遊ぶ。草津のまちがいつの間にか好きになる。そんな子どもフェスタに魅了され、気づけば毎年参加していました。

ボランティアとして、『たび丸くん』というご当地キャラの着ぐるみに入りました。元気な子ども達に囲まれて、もみくちやにされました。

ボラセンの学生スタッフで考えた遊びのブースを作って、子ども達と遊びました。楽しんでくれている様子を見て、一安心。

地域の方に「おつかれさま」と声を掛けて頂いたり、仲良くなった子どもたちと「また来年ね!」と話したり。少しだけ地域の一員になったような気持ちになれるボランティアでした。

2006年度～：学生スタッフが活動  
2009年度～2015年度：学内でのボランティア募集や、サークルにも呼びかけて参加



スリッパを使った遊びのブース(2011年度)

●『大津祭』ボランティア

■2019年度社会学部卒業 玉田 凌河

長く引き継いできた『大津祭ボランティア』の企画。大津の大学に通うのに大津祭を知らないのは勿体ない。そんな想いで関わり始め、以後3年に渡って活動を続けました。

祭を見る側から担い手側に回る、それだけで景色はガラリと変わります。観衆が混み合う道を堂々と歩き、囃子と掛け声が段々とヒートアップしていく。気づけば地域の方と一緒に声を出して息が合ってくる。大津祭ボランティア企画の参加者にリピーターが多いのは、祭の担い手としての一体感と高揚感に惹かれるからなのだと思います。

地域の方と同じ空間、同じ立場で活動することが、このボランティアの魅力の一つではないでしょうか。今後も龍谷大学生が地域とつながり魅力に気づくようなボランティア企画が続いて欲しいなと思います。

2004年度～：学生スタッフが活動  
2008年度～：学内でボランティア募集  
2011年度～：学内募集時のお囃子演奏や学生交流会館エキジビションで展示しながら広報  
2020年度：社会情勢により大津祭中止。来年の募集に繋がる広報に取り組む



曳山ボランティア(2015年度)

■特定非営利活動法人 大津祭曳山連盟 理事長 元田 栄三

ボランティア・NPO活動センターが設立20周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。貴センターが20年もの間、様々な活動を通じ、学生スタッフの育成に尽力されてこられたことは、誠に意義深く敬意を表したいと思います。大津祭を通じて大津町衆とのふれあいや、歴史文化を体験いただけたことは、伝統を受継ぐ私たちにとって大変心強いものでございます。また、学内でPRを兼ねた祭囃子を実演したときには、学生の方々が気軽にお囃子体験に参加いただいたこと、私にとっても大変貴重な体験でした。今後も、私たち地域と一つになって共に活動できれば、この上ない喜びでございます。貴センターの益々のご発展を心よりご祈念申し上げ、お祝いのメッセージといたします。誠にありがとうございます。



観客警護ボランティア(2019年度)



宵宮ボランティア(2009年度)



学内広報時にお囃子演奏(2013年度)



学生交流会館での展示作業(2018年度)

これまで紹介した日常的なボランティアコーディネートや SNS などでの情報提供、ボランティア活動のきっかけとなる様々な企画など、学生スタッフが取り組んでいることは多岐に渡っています。そのためには、社会課題に対する意識を持ち、組織運営力、コーディネート力などの幅広い知識や経験が必要となってきます。学生スタッフは年間3回程度の合宿を通して、チーム作りや課題解決、次年度の取り組みなどを話し合ってきました。その合宿作りに関わった卒業生・現役学生スタッフの声と、両キャンパス代表の学生スタッフ活動に対する想いを紹介します。

#### ● オリエンテーション合宿

##### ■ 2015 年度政策学部卒業 星野 智子

100人規模が参加するオリエンテーション合宿の企画メンバーとして活動できたことは、私の大学生活の中でも貴重な経験でした。年度初めに実施するこの合宿は、経験値を持った先輩スタッフ、まだ知識の少ない新スタッフの両方にとって有意義である必要があり、ワークの内容を考えるのにとっても苦労しました。皆が趣旨目的を理解し、同じ方向を向いた状態で2日間を過ごせるようにするにはどうすれば良いかをただただ模索し続けていたように思います。様々な視点に立って、多角的に物事を考えることの難しさと、メンバーの知恵を振り絞ってワークを組み立てていく楽しさ、そこに夢中で取り組んでくれる参加スタッフの姿勢を見た時の達成感は今でも忘れられません。



2009 年度



2013 年度



2016 年度



2018 年度

#### ● 夏合宿・春合宿

##### ■ 2020 年度農学部3年生 大屋 晴太郎

私は1年生の時に夏合宿と春合宿を行い、あることを感じていました。それは、合宿を行っても日頃の活動に活かしきれていないということです。そこで、2年生では日々の活動において重要な「班・係」をテーマに、夏合宿を行いました。合宿では、新たな班構成案をつくることを目標に、班係の仕事内容を見直し、より円滑に活動するにはどうすればよいかを考えました。当日は学生スタッフの活発な議論により、意見をまとめるのに非常に苦労しました。結果的には全員が納得する形で新たな班構成案を作ることができました。合宿が終わった後も、この案を基に班係について考え、最終的には新しい班構成を作り上げることができました。これまででない形でしたが、学生スタッフのみならず、ボラセン全体で成長できた合宿になりました。



2019 年度瀬田夏合宿の様子



2011 年度瀬田春合宿の様子



2014 年度深草春合宿の様子



2017 年度深草夏合宿の様子

#### ●深草キャンパス学生スタッフ 2020 年度代表

##### ■ 2020 年度法学部 3 年生 世田 文貴

私にとってこのセンターの存在は一体どのようなものであろうか。学生スタッフとなって3年の歳月が流れようとしている今において、容易にその答えは考え付きません。

では、私とセンターとの関わりは、特別なものではなかったのだろうか。その答えは、「否」です。

それでもなお、最初の問いの答えが出てこないのは、このセンターの存在が私にとってあまりにも大きいからです。

私は、当初からボランティアに特別な興味や関心があったわけではありませんでした。大学生としてやりたいことを考えておらず、ただ居場所を求めていただけの私が、何故学生スタッフになったのか。それは、「偶然に」です。キャンパス内で、「新入生歓迎!」のパネルを持ったえんじ色のパーカー姿の人たちをたまたま見かけ、その時に感じた僅かな好奇心から、私は彼らの後を追っていききました。

その日を境に、私の見る世界は大きく変化しました。私は地域の行事に参加し、幅広い世代の人々と交流を持つことで、人の温かさや関わることの大切さを知りました。また、ボランティアを通じて、障がいを抱えている人や震災による心の傷を負っている人と接し、彼らの言葉や気持ちに触れました。さらに、龍谷祭に出展する企画責任者を務め、ボランティアの魅力をどう発信すべきかについて仲間と共に思考し、仲間がいる心強さと喜びに気付きました。そして私は代表となり、今日まで歩みを続けてきました。

学生スタッフとなった日が遠く感じる程、今日までの日々には大切な経験や出会いがたくさん詰まっています。もし「偶然に」がなければ…。今となっては想像もつきません。このセンターで学んだことや挑戦したことは、私の生涯においてかけがえのないものであると自信を持って言えます。考えなしにフラフラと彷徨っていた私が自らの可能性に気づき、それを発揮できる舞台となったこのセンターは、間違いなく私の「真の居場所」です。

過去 20 年の間にも、私と同じように思う学生スタッフはいたのだろうか。言うまでもなく、このセンターは多くの学生スタッフにとって必要不可欠な存在であったでしょう。

私にとってこのセンターは…。以上がその答えです。私たちの大切な居場所であるこのセンターが、この先 10 年、20 年と長く、遠い未来まで続いていくことを願っています。



#### ●瀬田キャンパス学生スタッフ 2020 年度代表

##### ■ 2020 年度社会学部 3 年生 東 里音

私にとってボラセンは、様々な経験を通して自分を成長させられる場所です。私がそう感じている理由を、少し紹介したいと思います。

まず、私がボラセンで活動を始めて、「企画」というものが何なのか、企画書とは何なのか分からなかった頃、先輩が根気よく教えて下さり、少しずつ経験を踏ませて頂きました。そうした体験を通して、自然と理解を深め、出来ることを増やし、後輩への引き継ぎ方を学んだように思います。ただ「こうするんだよ」とやり方を押し付けるのではなく、自分なりに伝えていけるような力をつけることができました。

次に、ミーティングや話し合いを通して、同じ物事でも、人によって見えている視点は違うこと、そうした様々な視点からの意見があることで物事の内容に深みが出ることを、体験を通して学びました。自分とは違う意見を聞くことで考え方の幅が広がり、見えるものが多くなったように思います。複数人での話し合いを面倒くさがることなく、楽しめるようになりました。

また、代表として前に立ち全体をまとめる経験もさせて頂きました。私が代表になって一番力がついたと感じる点は、コミュニケーション力です。学生スタッフ間の連携を取り、ちょっとした問題を早い段階で解決するため自ら行動することが増えたり、他大学との交流の機会でも積極的に関わる経験を重ねたりしたことが、力になったと思っています。実際に話してみることで、その人を知り、どうすればより様々なタイプの人意見を出しやすくなるのかなど、具体的に考えるようになりました。

さらに、ボラセンに集まる人は個性豊かで、そうした人達との交流はとても自分の刺激になり、新たな知識を得ることが出来ます。加えて、様々な人がファシリテーターをするミーティングに参加することで、多様なやり方を知り、自分なりの進め方を見つけることができました。

様々な経験は、それだけ自分の力になると私は思っています。そうした機会を多く得られる場所で、自分の成長を感じられるのが私にとってのボラセンです。これからは、後輩を後ろから支えつつ、自分もまだまだ経験を積んでいきたいと思っています。

